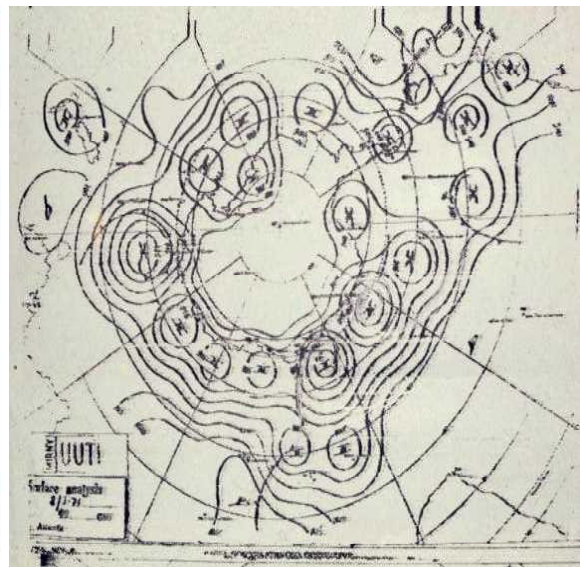
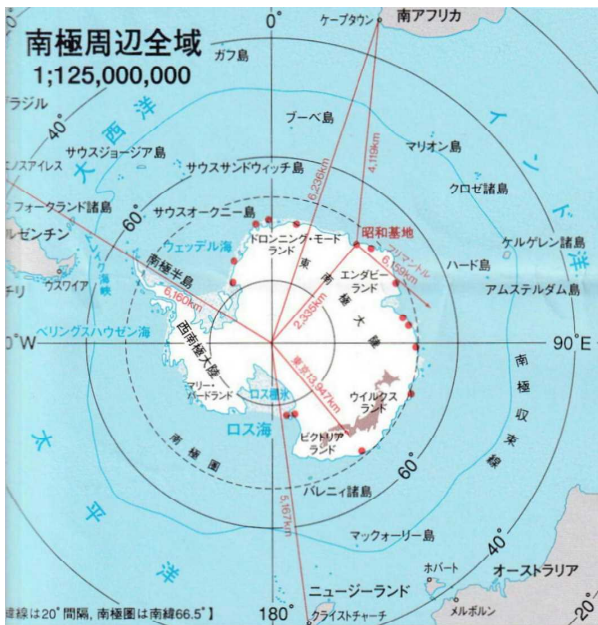


詩篇19篇の味わい

NTT-OB 福島 勲

1969年11月25日、私が通信担当隊員として参加した第11次南極観測隊（松田達郎隊長以下越冬隊30人・夏隊10人、定常観測の他、オーロラ観測用ロケットの発射とみずほ基地を新たに建設する）を乗せた南極観測船ふじは東京晴海埠頭を離れ、南極に向けて出航した。途中、赤道を通過し、12月10日には、オーストラリアの西のフリマントルに寄港。一週間後、再度、南極に向けて出港する。



南極大陸のまわりを渦巻いている暴風圏 (ミズイ基地による天気図)

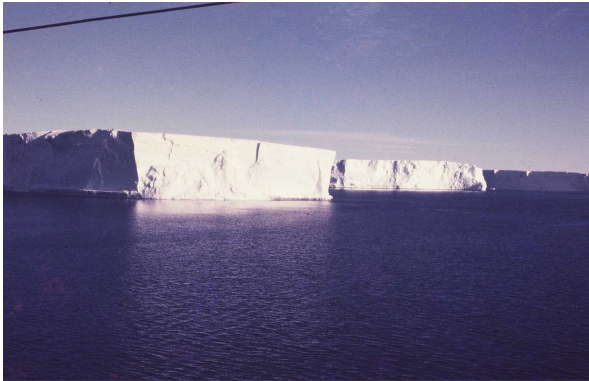
オーストラリア大陸の約2倍ほどの広さの南極大陸の周りには、年中大荒れの暴風圏が取り巻いています。南緯40度から60度は暴風圏です。

21日にはその暴風圏に入る。昔から南極大陸に近づく者を寄せつけない城壁のようです。「吠える40度、叫ぶ50度」と船内で聞かされました。

砕氷船でもあるふじの船底は丸いため、一寸法師のおわんよろしく、前後左右によく揺れる。特に前後に揺れると食べたものを嘔吐してしまう。船酔いひどく寝たきりになる。この時は、あまりの船酔いに心底「ああ、来るんではなかった」と思いました。その暴風圏を通過するのに3日かかりました。

厳しく苦しかった暴風圏を過ぎるや、冰山や海氷の浮かぶ氷海に出ると、海は暴風圏がうそのように静かになる。別世界が現れた。なんと、夏の南極海風景です。

私は北海道で生まれ育って、それまで美しい青空はいくつも見てきましたが、別格のものです。その光景に圧倒されました。その時、内側から御言葉があられ出てきました。詩篇19篇です。



巨大な冰山群



ゆっくりと浮上して泳ぐミンククジラ

天は 神の栄光を語り告げ 大空は御手のわざを告げ知らせる。

昼は昼へ 話を伝え 夜は夜へ 知識を示す。

話しもせず 語りもせず その声も聞こえない。

しかし その^{こうぼう}光芒は 全地に そのことばは世界の果てまで届いた。

(詩篇19:1-4a)

もう50年以上も経ちますが、私はその時の感動を今も忘れることはできません。その感動を、西東京市のマートル・ベーカー宣教師たちに無線電報で送りました。

「現在、南極海を航行中。ああ、何と美しい青空だろう！

澄みきった青空、真っ青な海、巨大な冰山群、すぐそばを鯨が泳いでいる。

南極海の美しさに、感動、感動、また感動。」

詩篇19篇は、大きく3つに区分されます。①1-6節は、自然界を通して神が与えている啓示（自然啓示）、②7-11節は、聖書を通して神が与える具体的な啓示（特別啓示）、③12-14節は、敬虔な信者の祈りです。

天は 神の栄光を語り告げ 大空は御手のわざを告げ知らせる。(1節)

この節は、神がどのようにご自身の存在を啓示されているか表現しています。

「天」は、夜の天体を指し、「大空」は昼の空を指します。

詩人は、一日中どの時間であったとしても、神の栄光とその能力の素晴らしさから逃れることができないと讃えます。

昼は昼へ 話を伝え 夜は夜へ 知識を示す。(2節)

「昼は昼へ」という表現は、「日の出から日の入りまで」の意味で、一日を通して観察できる軌道線上を移動する太陽の運動を指していると解釈できます。「夜は夜へ」という表現も、日暮れから夜明けまでの天体の運動を指していると理解できます(5節参照)。

いずれも、神の栄光と偉大さの啓示は、預言者の出現とは異なり、途切れることなく、常時表されていることが書かれています。天地が創造されてから、一日たりとも天と大空が神の存在およびその偉大さを語らなかったことはありません。

宇宙の広大さについて考えたい。この地上で最も早いとされる光(電磁波)は、1秒あたり約30万km/sの速さです。1年あたりでは約9.5兆kmを移動することになります。望遠鏡で見ることができる最も遠い地点に到達するのに100億年かかります。それでも、これは宇宙の最も外側の限界には達しません。

今、天文学者は、宇宙には限界が全くないかもしれないと考えています。私たちの地球は、限らない広がりの中の小さな斑点に他なりません!

また、星や他の天体の数も考えてみたい。肉眼で約5千個の星を見ることができます。小さな望遠鏡で約200万個を見ることができます。しかし、ハッブル宇宙望遠鏡を使えば、個々の星どころか、二千億以上もの銀河を見ることができます。

さらに、天体の距離についても考えたい。星は大空に密集しているようにも見えますが、それらの間の距離は非常に離れているので、何百万kmも離れた空の海に浮かぶ孤独な灯台船に例えられています。

昼も夜も、天体は創造主なる神の力と知恵の素晴らしさを語っています。

夜空には、数え切れないほどの星々と月光が輝き、昼空には、太陽の光と熱が照り注ぎます。

詩人の思いは、もし、これらの「御手のわざ」によって創られた生命のないものが人の心をへりくだらせるほどの輝きと雄大さを持っているならば、それらを創られた創造主の栄光と偉大さは、それをさらに上回るものであろう、というものです。

話しもせず 語りもせず その声も聞こえない。

しかし ^{こうぼう} その光芒は 全地に そのことばは世界の果てまで届いた。(3-4節)

「それでも地球は動いている」との地動説を唱えた理由でカトリック教会から異端判決を受けた天文学の父と呼ばれるガリレオ・ガリレイ（1564-1642）は、「被造界は第2の聖書である」と告白しました。

第1の聖書とは書物としての聖書ですが、被造界は言葉にならない言葉で、神の栄光を表し、神の偉大さを証しし、神の御心を示しているというのです。

美しい自然界を通して明かされる神の啓示は、誰にとっても明白に分かる直接的な「言葉」によるものではありませんが、それが物語る真理から逃れることができる人は誰ひとりいません。なぜなら、この世界のすべてが神の被造物の中に存在しているからです。

12月31日、定着氷縁に停泊。ペンギンの出迎えを受ける。



出迎えのペンギンたち



昭和基地に着いたふじ、上方に南極大陸が見える

1月2日には昭和基地に着きましたが、時は真夏の南極。夜12時になっても陽が落ちることがありません。白夜の世界です。



沈まぬ太陽（夜12時前後の間歇写真）

神は天に 太陽のために幕屋を設けられた。
花婿のように 太陽は部屋から出て勇士のように 走路を喜び走る。
天の果てからそれは昇り 天の果てまでそれは巡る。
その熱から隠れ得るものは 何もない。（4b-6節）

この詩の著者であるダビデは、擬人法を使い、太陽を人間のようにならべています。

「幕屋」はここでは夜を表し、太陽が夜明けに上がって来て、日暮れに沈んでいく様子を、仕事が終わって家に帰る人間にならべています。

太陽は、夜が明けると、神の栄光の啓示を物語るために喜びを持って、力強く登場するのです。ここで、「部屋から出て来る花婿のようだ」という表現は、当時のユダヤ人文化に基づいています。

聖書時代、夫が妻と一緒に天幕に入り、交わりによって婚姻を完成させるまでは、妻をめとったと言えませんでした。その儀式が終わった後、夫は妻を迎え入れたことを発表するために天幕から出て来たのです。

太陽は、婚姻を完成させた喜びに満ちて天幕から出て来る花婿のように、神の栄光をこの世に告げ知らせる喜びをもって、毎日上るのです。

また、太陽は、戦いに勝った勇士のように力強く、誇りに満ちてその定められた軌道を走ると書いてあります。その運動は、絶えることがなく、地上の隅々の人に日々目撃されます。

太陽の光という言葉なき啓示は、耳が聞こえない人にも明確に神の栄光の素晴らしさと偉大さを語ります。

また、目が見えず、太陽の光を視覚で体験できない人も、それから発する熱を感じますから、その偉大なるエネルギーを否定できません。神の創られた被造物が神の栄光の素晴らしさを物語っているのです。

聖書を通して神が与える具体的な啓示（7-11節）

この詩篇19篇の後半は、自然界の啓示と比べて聖書という神の啓示がどれほど素晴らしいかが書かれています。

自然界は、創造主の大きさ、知恵、力を啓示しますが、神のことばである聖書は見えない神ご自身を啓示する神のことばです。人間への神の語りかけのことばです。

人間はそれに応答することを求められています。ですから、聖書は祈りながら読むべき書物なのです。

旧約聖書はモーセを通して律法という形で与えられましたが、主イエスは、

「人はパンだけで生きるのではなく、
神の口から出る一つ一つのことばで生きる」（マタイ4:4）

と申命記8章3節の言葉を引用して、聖書は人の心の糧食であることを示されました。

また、使徒ペテロは

「生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、霊の乳を慕い求めなさい。
それによって成長し、救いを得るためです。」（I ペテロ2:2）

と、聖書を霊の乳として語っています。

さらに、使徒パウロは

「聖書はすべて神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と
義の訓練のために有益です。神の人がすべての良い働きにふさわしく、
十分に整えられた者となるためです。」（II テモテ3:16-17）

と語っています。

聖書は単なる教訓の書ではありません。驚くべき書物です。人の心に恵みを与え、矯正し、良い働きに整えられた者にする、心の糧食であり、また悪に対する心の武具、御霊の剣（エペソ6:17）でもあります。

この詩篇19篇では、「聖書のことば」を表現するために「おしえ」「証し」「戒め」「仰せ」「恐れ」「さばき」と言う言葉を使い、聖書のさまざまな側面を実生活のおりおりの経験から多角的に表現されています。

7～9節の詩は、パラレル構造を持つ文章で、上品かつ読み手に優しい表現です。ヘブライ文学の同義的並行法（パラレリズム）です。

それぞれの節は、「名詞」で始まり、「形容詞」が次に続き、最後は「動詞」によって完結します。名詞は、神の律法の側面を表し、形容詞はその完全さを讃え、動詞はそれがどのように神の民を祝福し、なぜそれが彼らの信仰の対象にふさわしいのかを伝えます。

主のおしえは 完全で たましいを生き返らせ

主の証しは 確かで 浅はかな者を賢くする。(7節)

「主のおしえ」とは、主なる神のトーラー（ヘブル語）という表現で、旧約聖書の律法を表す基本的な表現です。トーラーとは、教示という意味があり、神が「神の民に与えた指示」ということです。

「主のおしえ」は、「たましいを生き返らせ」と書かれています。ここで「生き返らせ」と訳されている言葉は、「元の状態に戻す」という意味があります。実は、これとまるで同じ表現が詩篇23篇3節に登場します。

そこでは、牧者が迷った羊を本来属しているべき群れに戻す姿を連想させ、神がその人の心を本来あるべき場所に戻す姿が描かれています。

ですから、ここでも「たましいを生き返らせ」という表現は、霊的な救いと捉えるよりも、「主のおしえ」を心に留めることによって、その人が本来あるべき状態に戻ることができるかと理解することができます。

「主の証し」は、浅はかな者を賢くします。ここで「浅はかな者」と訳されている言葉は、「若者」という言葉です。若者は、経験が少ないために、さまざまな意見に振り回されます。ですから、もし、その人が偏見のない心で主の証しを受け入れるなら、すでに確定した神の言葉によって、必要な知恵を受けることができるのです。

主の戒めは 真っ直ぐで人の心を喜ばせ

主の仰せは 清らかで人の目を明るくする。(8節)

「主の戒め」とは、神が与える生活の規範のことです。詩篇103篇18節では、この言葉が主の契約と同じ意味で使われています。

主の戒めは心の糧となるので、心の渴きをいやし、喜びが溢れてきます。

「主の仰せ」とは、命令のことです。ここで「清らか」と訳されている言葉は、「汚点がなく、きれいな」という意味です。汚れがない真理は、「人の目を明るくする」と書かれています。

「人の目を明るくする」とは、当時の表現で「洞察に富ませる」という意味です。問題をよく理解し正しい判断がくださるようになるということです。

主からの恐れは きよく とこしえまでも変わらない。

主のさばきは まことであり ことごとく正しい。(9節)

「主からの恐れ」という表現も実はモーセの律法のことを指しています。この表現は、主を恐れることを命じていることばを指します(詩篇111:10)。

「とこしえまでも変わらない」という表現には、律法の不変性よりも、その不動さが強調されています。主を恐れなさいという命令は、どの時代にも変わらない神の期待であることが伝わります。

「主のさばき」というのは、罪に対する審判ではなく、神の判断の基準が記されている律法を指します。神の識別力によって書かれている律法は、「まこと」そのものであり、神がことごとく正しいように、その啓示もすべて正しいのです。

それらは金よりも多くの純金よりも慕わしく
 蜜よりも蜜蜂の巣の滴りよりも甘い。
 あなたのしもべも それにより戒めを受け
 それを守れば 大きな報いがあります。(10-11節)

主の御言葉は「金よりも」「多くの純金よりも」「蜜よりも」「蜜蜂の巣の滴りよりも」と、どんなものよりも慕わしく、いかに甘く美味しい糧食であるか、その喜びと満足には「飽きがない」ことを教えています。

敬虔な信者の祈り

だれが 自分の過ちを 悟ることができるでしょう。
 どうか 隠れた罪から 私を解き放ってください。
 あなたのしもべを ごうまん 傲慢から守ってください。
 それらが 私を支配しないようにしてください。
 そのとき 私は 大きな背きから解き放たれて 全き者となるでしょう。
 私の口のことばと 私の心の思いとが
 御前に みまへ 受け入れられますように。
 主よ わが岩 わが あがな 贖い主よ。(12-14節)

おきてによって主の御旨を知った詩人は、自己反省と心よりの祈りに導かれます。「贖い主」とは、自分の近くにおいて、自分が売られる身であったのを買い戻してくれる存在です。

例えば、自分が貧しくて奴隷になりそうになっていたけれども、自分の近い親戚が大金を支払って、買い戻してくれた、という状況です。そうなさってくださったのは、私たちの主イエス・キリストです。

神であられるのに人となって、私たちのところへ来てくださったのです。そして、ご自身の血という代価を支払って、私たちを神のものとすべく買い戻してくださったのです。

その結果、驚くべきことに、私たちが創造主なる神と親しい交わりができるようにな

りました。なんと感謝なことでしょう。

聖歌497番「輝く日を仰ぐとき」の歌詞を味わいながら賛美しましょう。

聖歌497番【輝く日を仰ぐとき】
(偉大なるかな神 How Great Thou Art)

- ① ^{かがや}輝く日を仰ぐ時 ^{つきほし}月星ながむる時
^{いかすち}雷鳴り渡る時 ^{まこと}まことの御神を思う
(おりかえし)
わがたま いざ たたえよ 大いなる御神を
わがたま いざ たたえよ 大いなる御神を
- ② 森にて 鳥の音を聞き ^{そび}聳ゆる山に登り
谷間の流れの声に ^{まこと}まことの御神を思う
- ③ ^{みかみ}御神は ^{よびと}世人を愛し ^{みこ}ひとりの御子をくだし
^{よびと}世人の救いのために 十字架にかからせたり
- ④ ^{あめつち}天地 造りし神は 人をも造り変えて
正しく聖きたましい持つ身と ならしめたもう
- ⑤ まもなく主イエスは来たり 我らを迎えたまわん
いかなる喜びの日ぞ いかなる栄えの日ぞ

